

26. 結核性髄膜炎による水頭症に対し脳室ドレナージを施行した粟粒結核の1例

日暮浩実, 黒田文伸, 濱岡朋子
八木毅典, 佐々木結花, 山岸文雄
(国療千葉東・呼吸器科)
大隅悦子 (同・神経内科)
大賀 優, 大里克信
(千葉県がん・脳神経外科)

症例は36歳男性。平成11年5月全身倦怠感が出現し近医に入院したところ、胸部画像所見で粟粒結核が疑われたため当院に転院となった。意識レベルの低下が見られ、頭部CT写真で水頭症の所見が認められた。喀痰、尿、髄液から抗酸菌が検出され、結核性髄膜炎を合併した粟粒結核と診断した。抗結核剤と副腎皮質ステロイド剤を投与し、水頭症に対して脳室ドレナージを施行したが、多臓器不全のため第56病日死亡した。

27. 急性に増悪をきたした多発性筋炎に伴う間質性肺炎の1例

志村龍飛, 本田 明
(福祉医療センター東松戸・呼吸器科)
高林克日己 (同・内科)

多発性筋炎/皮膚筋炎における急性間質性肺炎のうち、間質性肺炎発症時のCPK値が高値のものは低値なものに比し予後良好例が多いとされている。しかし、一部にはステロイド抵抗性を示す一例もみうけられる。CPK値が高値でステロイドパルス後に一時増悪をきたした多発性筋炎に伴う間質性肺炎に対しシクロスポリンの投与を試みた症例を経験したので報告する。

28. 若年男性に発症したNSIPの1例

弥富真理, 永川博康, 高橋義彦
三上 真 (公立長生・内科)
安川朋久 由佐俊和
(千葉労災・呼吸器外科)
河端 美則
(埼玉県立循環器呼吸器病センター検査部)

症例は26歳男性。主訴は約半年持続する呼吸困難。初診時、胸部X線上、間質陰影を両下野優位に認めた。BALにて、リンパ球70%と上昇を認めたが、TBLBでは、確定診断がつかず、VATSにて、NSIP(Group 2)の診断が得られた。ステロイドパルス療法にてほぼ陰影は消失し、症状は改善された。20歳代のNSIP発症は稀であり報告した。

29. 潰瘍性大腸炎治療薬メサラジン(ペンタサTM)による薬剤性肺炎の1例

西脇 徹, 戸島洋一
(東京労災・呼吸器内科)
徳留隆博 (同・臨床病理科)

症例は32歳女性。平成12年7月潰瘍性大腸炎を発症。メサラジンにステロイドを追加し改善したが、ステロイドの減量中に発熱、咳嗽出現。肺炎像を認め、抗菌薬で改善せず入院。BAL中の好酸球、リンパ球比の増加、メサラジンに対するDLST陽性、TBLBで肺胞腔内のマッソン体、間質のリンパ球・好酸球浸潤より薬剤性肺炎と診断。メサラジン中止、ステロイド増量により改善を得た。なお今後、薬剤誘発試験を予定している。

30. 乳癌の再発転移に伴う微小腫瘍塞栓症のため死亡した1症例

浅香佳子, 多部田弘士, 和田暁彦
杉戸一寿
(船橋医療センター・内科)
唐司則之 (同・外科)

症例は57歳女性。左乳癌術後に局所再発と骨転移を認め、抗癌剤およびホルモン剤投与を行っていた。平成12年5月初めより労作時の息切れが出現、徐々に進行し6月3日入院。肺血栓塞栓症を疑い加療を開始したが、呼吸不全の進行のため6月6日死亡された。剖検にて両肺末梢動脈内、脳血管内をはじめ全身の細動脈系に腫瘍塞栓症を認め、乳癌の再発転移に伴う肺塞栓症による呼吸不全、さらに脳出血の合併が死因と考えられた。

31. 抗凝固薬の過量服用により出血傾向をきたし、減量中に再発をみた肺血栓塞栓症の1例

星野 晋, 橋本友博 (千大・肺内)

症例は59歳女性。主訴は皮下出血、関節痛。平成12年1月肺血栓塞栓症(PTE)を発症。同年2月に当科転院となり、ワーファリンとバラミヂンを併用されていた。退院後1ヶ月程で上記主訴出現。TT<5%, INR>5と著明な出血傾向を認め再入院、内服中止としたところ入院第8病日にPTEを再発した。慎重に抗凝固療法開始し、下大静脈フィルター留置、抗凝固薬の服用を徹底し、現在まで良好に経過している。